第八十三回六甲会（令和七年十二月五日）　稲畑廣太郎選

兼題「埋火・千鳥」その他当季雑詠

第一句会入選句

海暮れて旅の記憶に鳴く千鳥　村松咲子
潮引きて浜辺千鳥の天下なる　前出美千子
埋火の燃え盛る時窺ひぬ　吉川博子
埋火や猫の居座る場所のあり　多田羅紀子
埋火の如し秘めたる恋心　石角節子
○浦人に守られし磯や夕千鳥　足立朱麻
水色の影ひらり立つ浜千鳥　三好ようこ
埋火やいつも身近に母のゐて　石角節子
細波の夕日の綺羅や群千鳥　一坪信舟
洲に遊ぶ海の虜や磯千鳥　足立朱麻
埋火の灰は静かに朝支度　藤田敦雄
心もとなく足運び夕千鳥　前出美千子
浜辺歩す何に飛び散る千鳥かな　前出公子
波寄する千鳥の歩み覚束な　田邉育子
埋火の立ち消えぬやう灰被す　大西美知子
神まつる岩屋に遊ぶ千鳥かな　松村咲子
引く波を追ふ少年や夕千鳥　吉川博子
風に乗り大橋渡る群千鳥　松村咲子
埋火を解きほぐしたる手のぬくみ　鎌野光子
埋火や鉄瓶の湯のさめやらず　田邉育子
海に逝き千鳥に託す言伝と　山田佳音
千鳥群れ三代句碑の建つ社　芳林淳子
波の穂に触れて隠れて夕千鳥　北上美佐子
埋火の祖父母に似たるぬくもりよ　前出公子
○浜風の優しく包む夕千鳥　吉川博子
磯千鳥遊びて遠く沖の船　藤田敦雄
埋火や火箸で様子探る祖母　石角節子
湖の光る渚や千鳥鳴く　三好ようこ
○子に持たす火箸埋火掻き回す　足立朱麻
日矢のさす砂淡き影浜千鳥　山田佳音
日本の塩湖と呼ばれ千鳥啼く　船山美貴
埋火を押して戻して逡巡す　山村千惠子
浜千鳥翼濡らして走り来る　田邉育子
淡路島偲ぶ俤夕千鳥　長安悦子
芦屋にも残る砂浜夕千鳥　鎌野光子
寄す波に驚く千鳥飛びはねて　池本準一
浜千鳥母なる海を離れざる　長安悦子
埋火に海鳴りいよよ高まれり　徳永由起子
埋火を囲み山音聴きてをり　船山美貴
千鳥飛ぶ若狭の波と鬼ごつご　奥田好子
漣に一声澄める千鳥かな　森岡喜惠子
虎落笛漁師言葉は情のあり　近藤六健
戯れに埋火探る火箸かな　多田羅紀子
千鳥の洲訪ね三代句碑訪ね　平尾孝子
埋火の火箸の先のけふの悔い　松村咲子
埋火や風の届かぬ闇のあり　三好ようこ
埋火を熾しつくづく聞き上手　惠島祥一朗
灰ならし立てて埋火終ひけり　前出美千子
鳴き砂を千鳥チチチと鳴きながら　長安悦子
埋火の所作美しき女将かな　大西美知子
○埋火を吹きて遊びて叱られて　中本　宙
埋火に顔を突込むキセル爺　室田妙子
埋火の灰をならして今日を終ふ　蔭山夢宙
浜千鳥石の隙間を覗きけり　室田妙子
黒潮を大きく舞へり群千鳥　黒田千賀子
流木に返す波風千鳥啼く　中本　宙
埋火を熾し青春戻り来し　近藤六健
千鳥駆く寄せ来る波を友として　多田羅紀子
埋火や秘密の箱のラブレター　奥田好子
埋火を足して聞いてる聞かさるる　池本準一
埋火の恋もう灰となりしかな　黒田千賀子
埋火を掻けば故人のよみがへり　中島庸子
埋火の上に手すさび子の線画　藤田敦雄
○埋火や母のぬくもりくるみをり　徳永由起子
埋火や主婦に憂ひのある時間　奥野千草
○埋火や灰に書き消す頭文字　金田八江子
吾の行く手つと横切りし川千鳥　金田八江子
そろそろと埋火さがす長火箸　金田八江子
○埋火を確かめてより祖母の留守　船山美貴
渡月橋くぐり飛び立つ千鳥かな　中村澄子
埋火をかき出すことも朝の用　北上美佐子
寒灯の庭が好きですてふ女将　奥野千草
喪の家の埋火しづけさを加ふ　徳永由起子
埋火や俳句なんぞや語り合ふ　谷本房子
埋火を足して心のおもてなし　大西美知子
黒船に浜も千鳥も大騒ぎ　長安悦子
埋火の隠しきれざる火の香かな　鎌野光子
立ち上がる度に埋火灰を寄せ

埋火に長き煙管の記憶かな　石角節子
埋火や子の刻ひそと物の息　足立朱麻

○夕千鳥足跡風に剥がれゆく　前出公子
磯千鳥波打際を明るうす　池本準一
退く波に一声落とし夕千鳥　奥野千草
埋火の闇をまさぐる火のぬくみ　一坪信舟
埋火やグループライン返事拒否　吉川博子
埋火にほぐるる記憶ありにけり　松村咲子
しろがねの波敷く淡海千鳥群る　山之口倫子
千鳥鳴く湖の郷愁たゝむ波　奥田好子
沈黙の続き埋火掻いてをり　森岡喜惠子
主婦の旅浜に千鳥と遊びけり　中村澄子
埋火のけふを了ひて明日のため　平尾孝子
古官舎一人の今宵虎落笛　森岡喜惠子
寄せ返す伊根の浦曲の浜千鳥　中村澄子
埋火や寮生活の蘇る　森岡喜惠子
この家に嫁して埋火教へられ　中村澄子
音に散る千鳥のやがて陣を組み　北上美佐子
磯千鳥沖の青さを眺め鳴く　奥野千草

○蒼天の海の輝き遠千鳥　谷本房子
埋火を灰の懐抱きをり　中島庸子
浜千鳥小さな声が聞こえけり　蔭山夢宙
太陽に光る芦屋の川千鳥　黒田千賀子
埋火をつなぎおつやの仮眠なる　黒田千賀子
浜千鳥ちりちり波をかがやかす　室田妙子
埋火のごと秘めし我が恋心　近藤六健
芦屋川飛石跳ねて鳴く千鳥　平尾孝子
夕千鳥走りて止まりまた走る　山村千惠子
埋火や仕舞ひ稽古の四畳半　奥田好子
埋火を捜す振りする思案顔　近藤六健

○群千鳥鳴き鎮魂の古戦場　多田羅紀子
埋火や白みて昨夜の色となる　山村千惠子

◇　◇

（廣太郎先生出句）

浜千鳥歴史を刻む茅渟の海
千鳥鳴く父母を送りし日のやうに
埋火や人は灰へと還りゆく
寒灯の点り生家の目覚めゆく
埋火を埋めて過去を埋めゆく

第二句会入選句

埋火にふつと桃色吐息かな　小柴智子
荒磯や千鳥の跡を波攫ふ　北井真有美
群千鳥より逸れたる一羽かな　田村惠津子
夕千鳥耳傾けて目を凝らす　田中由子
摺り合はす掌に埋火のほの温き　前田容宏
句碑の辺に千鳥の影や雄松浜　河辺さち子

○埋火と言ふ明日への希望かな　玉手のり子
埋火や花鳥諷詠てふ思想　岡本やすし
埋火を退屈の手が掻き熾す　高橋純子
埋火やゴーギャン眠るタヒチ島　高橋育夫
千鳥来て汀を走る早き足　槌橋眞美
埋火の抱く温もりや母白寿　北井真有美
埋火を掻きぬ句心ふと動く　生澤瑛子
埋火や遠い記憶に祖母の声　田中由子
埋火や掻き出し赤き火に戻す　細田清子
もてなしの先づは埋火かき立てて　田附光映
波際にホの字点点浜千鳥　酒井湧水
埋火や呑み込む言葉つみ重ね　林　曜子
埋火に時を預けてをりにけり　河辺さち子
夕波やそぞろ心に千鳥啼く　岩鼻絹子

○埋火を心眼で見る灰の裏　奥山登志行
○一枚となりて反転群千鳥　前田容宏
声ほどに水は乱れず群千鳥　田附光映
埋火や本音とび出す夕まぐれ　高橋育夫
埋火を残し帰りを待つ仮寝　酒井湧水
文様となりて浮かびし千鳥かな　髙木雅惠
九十年生きて埋火守りたり　辻田あづき
田を鋤けばえさを求めて川千鳥　岡本やすし
埋火や大事に捨つるものの影　吉田知子
埋火を起こす挑戦古希半ば　北井真有美

○戯れて砂も踊りてはまちどり　新田佐代子
誘惑は今埋火を熾したし　玉手のり子
磯千鳥動く気配もなかりけり　田中由子
千鳥鳴く連絡船を迎ふ声　柄川武子
火を埋む傍らに聞く寝息かな　本郷桂子
ガスの来ず埋火大事なる暮らし　辻田あづき
幼き日千鳥追ひかけ須磨の浜　高橋純子
埋火へ息吹きかけて問ふ安否　岩鼻絹子
汀へとさ走る影や夕千鳥　河辺さち子

埋火にぬくもる神慮見えずとも　奥山登志行
人声の近づいて来る群千鳥　平田　惠
立ち上がる気力も失せて埋火に　南波喜久子
千鳥飛び波音だけが残されし　田村惠津子
埋火や隠れ部屋めく僧の居間　生澤瑛子
句仲間のやうな芦屋の群千鳥　小柴智子
○啼く声の暮れ黒点となる千鳥　本郷桂子
埋火やサントリーニの日は落ちて　高橋育夫
○かざす手になほ埋火の応ふあり　林　曜子
浜千鳥須磨の関所はこの辺り　藤井啓子
埋火や灰に火箸の跡ありて　髙木雅惠
海は凪河口旋回川千鳥　細田清子
埋火やたいやうフレア遠くして　吉田知子
埋火のほのかな温み人の情　辻田あづき
○波音を哀しくしたる千鳥かな　玉手のり子
たゝみ来る怒濤見つめし磯千鳥　岡本やすし
埋火や背丈を刻む柱傷　髙橋純子
足形を砂に残して千鳥の洲　林　曜子
制服でデートの二人夕千鳥　藤井啓子
埋火や心に秘めし悔ひとつ　岩鼻絹子
○早立ちの客へ埋火まづ起こす　河辺さち子
旅枕千鳥鳴く夜の浅眠り　前田容宏
埋火や壁のメダルの半世紀　高橋育夫
雑談の埋火掻けばいも匂ふ　細田清子
もう波に千鳥はのりし浜に波　辻田あづき
埋火や心柱ごと見えぬもの　岡本やすし
埋火や命をつなぐ淡き色　平田　惠
ちよちよと鳴きよちよちと浜千鳥　玉手のり子
浜千鳥命の為の千鳥足　北井真有美
埋火や時止まりゐる僧の部屋　生澤瑛子
○埋火の香や十畳の闇を統べ　本郷桂子
埋火を見つめ糸口見つけんと　南波喜久子
埋火や火箸の先の秘め心　前田容宏
金の瞳の猫が埋火守りをり　藤井啓子
埋火を起こし客待つ心はも　田中由子
○風を追ひ波に追はるる浜千鳥　細田清子
淡き影をちこち零し小夜千鳥　酒井湧水
埋火に留守をあづけてお買い物　辻田あづき
埋火や送りバントを初心とす　岡本やすし
埋火を大事にしたる祖母のゐて　髙橋純子
埋火やゆるりと時の過ぎし頃　玉手のり子
浜千鳥海の昏さを負ひて鳴く　生澤瑛子
埋火を掻きたて女将火の玉に　奥山登志行
波引いてゐるつかの間の夕千鳥　岩鼻絹子
青空に羽音広げて浜千鳥　南波喜久子

◇　◇

（廣太郎先生出句）

草丈に紛れざる色夕千鳥
埋火や火箸の先にある思案
埋火を守りて老舗六代目
鵺塚の夜の伽として川千鳥
埋火や燻ぶつてゐる夫婦仲

◎次回第84回六甲会は令和8年2月6日(金)開催です。

兼題　春の霜・盆梅